
オニゴト

pierrot

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オニゴト

【Nコード】

N3164Y

【作者名】

pierrrot

【あらすじ】

とある街にごく普通と思われる少女がいた。しかし少女は周りの人間とは少し違う「感性」をもっていた。それは少女が幼い頃から続いているある「趣味」が深く関わっている。

少女が巻き起こす問題の数々の裏側にある真実とは・・・

Part 1 一変貌一

Part 1 一変貌一

午後6時45分、ある少女は電車を降りて駅の改札へ向った。改札を出るといっきに人の数は増え、学校から帰って来たであろう学生の姿が目立った。ただ数人を除いては。

少女はある若者の集団に目を止めた。彼らは駅前の道を広がって歩き、こちらへ向ってくる。少女も彼らの方へと歩きだす。

ドンッ

途端、少女はよろめく。彼らも同じくバランスを崩す。双方の肩がぶつかったのだ。

「おい。」

イラついた声が聞こえた。少女はゆっくりと振り返る。

「なんででしょう。」

少女は怯えることなく答えた。

「なんででしょう。じゃあ、ないだろう？人にぶつかったんだ謝れよ。」

若者はそう言って少女のもとにせまる。周りの者も同じように少女を囲んだ。

「ああ、でしたら貴方方も謝罪する必要がありますね。私もぶつかりましたし。第一、道の真ん中に広がって歩くのもどうかと思いますから。」

相変わらず顔色ひとつ変えない少女に若者たちは笑った。こんな状況でよく反論できるものだ。立場が分かっているのではないか。そう少女に笑いかけた。

「キミ、馬鹿だろ？普通この状況だったら謝るのはキミだ。この後どうなっても知らないよ？」

そう言った若者の声、その仲間達の笑い声が駅前に響いた。

少女は小さく溜め息をつき、そして静かに微笑む。決して誰にも見られぬように・・・。

「場所移しませんか？」

少女が未だ笑い続ける若者に切り出した。

「ナニ？マジでその気なの？」

若者が再び少女に詰めよる。

「ヤダァー！なに本気になってんの？バツカみたーい！」

若い女がふたりして少女に笑いかける。呆れた少女は言った。

「べつにそんなじゃないですけど、ここじゃ通行人に迷惑がかかります。別の場所でちゃんとお話ししましょう。」

若者達は顔を見合わせ、少女に答える。

「いいよ。」

そう言った若者は怪しい笑みを浮かべた。

5分ほど歩くと大きな海浜公園が見えた。中に入りまた少し歩くと公園を照らすの光かりが少しずつ弱くなっていった。公園の中心部分まで来て少女は立ち止まる。

準備完了。

「うわー。こおんなひと気のないトコ連れて来るなんてずいぶんヤラシいねえ」

その言葉に若者達が盛り上がる。しかし少女は気にしない。本当に笑えるのはこれからだと知っているからだ。

少女は言う。

「先ほどの、あれは一体どちらが悪くなったんでしたっけ。」

若者は先ほどの調子で答える。

「ハハハッ、ナニ？まだ言ってるの？もういいじゃん。楽しもうよ。」

若者の答えに少女は冷たく答える。

「何を言っているんだ？ワタシがここに場所を移した理由を忘れたのですか？」

「だーかーらー。もういいじゃん。」

「じゃあ加害者は貴方方でいいんだな？」

少女の言葉に若者の表情が変わる。

「はぁ？」

少女が微笑む。そしてこう言った。

「謝れよ。」

今までとは明らかに違う声に若者は戸惑った。高く上品な話し方ではなく低く冷たい声。一瞬にしてその場の空気が変わった。ようやく若者の口が開く。

「ふざけてんのか。悪いのはテメエだろ？勝手に決めつけんなカス。」

少女の表情が変わった。

「カス、ね。ふうん。そうか、お前達にはオレがカスに見えるんだな。ふうん、なるほどねエ。だけどさアー・・・」

ゆっくりと少女が顔をあげ続けた。

「オレはお前達がそのカス以下だと思っただがどうだろう？」

若者の顔が引きつり強張る姿を少女は見ていた。そして同時に少女の右頬に向って若者の左拳が迫って来るのを確認した。

キャッ

女の声が夜の公園に響く。殴りかかった若者は少女の前にしゃがみ込み苦しそうに唸っている。

「これは正当防衛だがら許されるんだよな。」

そう言っただけ少女は駆け寄って来た他の若者に微笑みかけた。

「ふざけやがって!!」

もう一人が少女に殴りかかる。しかし、少女は男の拳が顔面に直撃する前にスルリとかわし男の腹に忍び込み鳩尾に一発。男はその場に倒れこんだ。

「ヒッ・・・。」

女ふたりは小さく悲鳴をあげる。すると少女は女の方に視線を向けた。

「なに？もう終わりなの？」

女は震えながら頷く。

「そう。じゃあ・・・」

そう言っただけの方に歩み寄ると少女は手を差し出した。

「え・・・」

戸惑う女に少女は「はあ」と呆れながらこう言った。

「金だよ。金。なに？タダで赦してもらえとおもったの？甘いよ。オレにケンカ売った挙句負けるなんて、こんなの暇つぶしどころか只の時間の無駄。解ったらサイフだして。」

「ホレ」と手を出す少女に女達はそれぞれの財布を差し出す。受け取った少女は財布の中のお札だけを抜き取り数を数えだす。

「ふうーん。これしか無いんだ。」

そう言っただけの少女は倒れこんでいる男に近づきそのズボンから財布を取り出す。

「なんだ。こっちのにあんじゃん。」

少女は男の財布から札束を抜き取り、空になった財布を投げ捨てた。そして女達の方へ振り向いた。

「じゃあ、オヤスミナサイ。」

そう言っただけの少女は公園を後にした。怪しげな笑みを浮かべて満足そうに夜空を見上げる少女の名は「瀬菜 弥琴」といった。

Part 2 一悪戯一（前書き）

瀬菜 弥琴はどこにでもいそうな中学3年生。しかしそんな彼女には昔から続いているある「趣味」があった。

彼女の「趣味」 Ⅱ 「遊戯」の目的は何なのか。

Part 2 一悪戯一

Part 2 一悪戯一

「ねえ、聞いて聞いて！昨日S高の男女の生徒が海浜公園で倒れてたんだって！」

そう言って「藍川 菊乃」は友人である瀬菜 弥琴に話しかけた。

「こわいよねえ。海浜公園で、確かこの辺でしょ？しかもS高は問題児の寄せ集め高校！そんな生徒が倒れてるなんて考えられる？」

藍川はしつこく瀬菜に話しかける。しかし瀬菜は見向きもせず、先ほど返却された数学のテスト用紙を見つめている。

「ねえ、聞いている？せーなーみーこーとーサーン！」

用紙を持つ瀬菜の手を揺さぶる藍川にようやく瀬菜が気づき口を開く。

「そんなことよりこんな点数のテストをどうやってお母さんに見せるか考えてくれない……。」

そう言って瀬菜は視線を用紙に戻した。そんな瀬菜を納得いかない表情の藍川が見つめていた。

「もうっ、なんなのよっ！」

「ちよっ……。」

藍川が瀬菜のテスト用紙を勢いよく取り上げた。瀬菜は用紙を取り戻そうとするが軽くよけられた。「どれどれ」と、藍川は瀬菜の答案に目を向ける。

「うわぁ……。」

途端、藍川の表情が変わる。それもそのはず、瀬菜の数学の点数はお世辞にもけしてよいものではない。ましてや受験を控えた中学3年生のとり点数とは思えないものだった。

「お返しします……。」

悲惨な点数のテストを藍川が申し訳なさそうに返した。瀬菜はそれ

を受け取り、すばやくファイルにしまつて藍川のほうに身体を向ける。

「で？さっきの話はなんだったの？」

その言葉に藍川は「そう！それっ！」とすばやく答えた。

「だから、S高の生徒が倒れてたんだって！この近くの公園で！」
藍川は興奮した様子で話し始める。そんな藍川の話をつまらなそうに瀬菜は聞いていた。当然の反応だった。なぜならその男子生徒を倒したのは他でもない「瀬菜 弥琴」自身だったからである。

「弥琴、リアクション薄っ！もっと楽しそうに聞けないの？」
そのままの調子で藍川が瀬菜に文句を言う。

「んゝ……。だってなんかよくありそうな話じゃん。きっと他校の不良かなんかにケンカ売って返り討ちにあつたんだよ。」

「ね？」と、瀬菜は藍川に言った。藍川も「そっかー……。そうかも！」と、納得したように瀬菜に微笑みかける。

「じゃあ、この話知ってる？」

藍川はまた別の話題を持ち出してきた。

「なに？」

瀬菜が聞き返す。

「ウチもクラスのイジメについてなんだけど……。」

そのとき一瞬、藍川の表情が暗くなるのを瀬菜は見逃さなかった。

「イジメ？このクラスに？まさか。」

藍川の声が小さくなる。

「ほんとだよ。仲嶋さんと篠本さんなんだけど……。」

「ああ。」

瀬菜は納得したように答える。

仲嶋と篠本に関して瀬菜はあまり良いうわさ聞いていなかった。なんでも、自分たちにとって都合の悪いことが起こるとすぐにヒトを利用したり、教師や大人の前ではころりと性格を変えてしまうという。いわゆる八方美人である。常に二人で行動しているためほかの生徒から仲間はズレにされることなく無事いままで学校生活を送

ってこれたということだ。

「それで？一体だれがイジメられてるの？」

瀬菜が尋ねると藍川は少し口ごもった。そしてようやく口を開く。

「鳴世……。」

「えっ……！」

その言葉に思わず瀬菜は声を上げた。

「東宮 鳴世」は、瀬菜と藍川の友人である。非常に温厚な性格で周囲からの評判もよかった。さらに容姿にも恵まれており、男子生徒から好意を持たれることが多々あった。だから、そんな東宮が他者からイジメを受けるなんて考えられなかった。

「原因は何だったの？」

藍川がうつむきながら答えた。

「それが、三角関係だったんらしんだよね……。」

意外な答えに瀬菜が目丸くして聞き返す。

「さんかくかんけい……？」

そんな瀬菜を藍川が呆れたように見つめ答えた。

「これは多分、弥琴が知らない話かもしれないけど……。」

藍川が話し始める。

「新城クンで、知ってるよね？サッカー部の。」

「うん。」と瀬菜がうなずく。

「新城クン鳴世のことが好きだったらしんだよね。それでよく仲嶋さんと篠本さんに相談してたらしいんだ。」

よくある話だな。と、瀬菜は思ったが話の腰を折るので言葉には出さなかった。

「それで、実はその……仲嶋さんも新城クンのことが好きだったらしくて……。」

大体話は読めた。恐らく仲嶋は新城が東宮に好意を持つことが許せなくてイジメをした……。こういうことだろう。瀬菜は話の流れを自分の中でまとめた。しかし、そうするとひとつ疑問が残った。

「鳴世はいつイジメをうけていたのかな？」

瀬菜は藍川に自分の疑問を問いかけた。するとまたしても藍川の顔が暗く沈んだ。

「弥琴はさ、イジメて何されると思う？」

意外な質問に瀬菜は少し驚き、少し間が過ぎてから答えた。

「どうだろう、私はそういうのされたことないからあんまりわかんないけど。一般的には、物が隠されたり、壊されたり・・・そんな感じじゃないかな。」

「そうだよな。」と藍川は瀬菜に答える。

「でもさ、それだけじゃないんだよ。昔はそうだったかもしれないけど今は、そんなことしたらすぐ大人に見つかるから・・・。」

藍川の声が暗くなる。瀬菜がつぶやいた。

「ネット。」

「うん。」と、藍川が静かにうなずいた。

「最初は、たいした書きこみじゃなくて鳴世自身あんまり気にしてなかったらしいんだけど・・・。だんだん書きこみがひどくなって、面白半分で便乗するやつとか出てきてそれで・・・。」

なるほど。それなら書きこんだ相手が誰だか分からないし、サイトの炎上だってある一石二鳥だ。瀬菜は納得した。

「でも、よくそれが仲嶋さんや篠本さんの仕業だってわかったね。」

瀬菜が藍川を見つめて言った。

「ウチもあんまり詳しくはわかんないけど、その書きこみに『新城クンに近づくな』て、あったらしいから・・・。」

「ふうん。」と、瀬菜は藍川から視線をそらし窓の外に目を向けつぶやいた。

「確信がほしいな。」

そう言って怪しげな笑みを浮かべる瀬菜に藍川は気づくことができなかった。

「ああ、またやってる。」

仲嶋 実菜は満足そう携帯画面を眺めそうつぶやいた。

「なに？」

篠本 由紀は仲嶋の携帯画面を覗き込む。見ると仲嶋の携帯画面には『あの』サイトが映し出されていた。仲嶋がそれを見ながら篠本に言う。

「ホント、いい気味よね。学校では、あんなにちやほやされてるのに裏ではこんな扱いされてるんだからさ。」

そう言って仲嶋は笑った。篠本もそれにつられて笑った。

「ホントにねえ、ヒトって何考えてるのかわかんないよね。」

「こんな簡単に裏切るんだからさ、」と、篠本ははき捨てるように仲嶋に言った。

パチン、と仲嶋が携帯を閉めてかばんの中へとしまった。そして、篠本と共に教室を出て昇降口へと向かう。

「仲嶋さん。」

名前を呼ばれて振り返るとそこには、瀬菜 弥琴が立っていた。

「弥琴ちゃん、どうしたの？」

仲嶋が不思議そうに瀬菜を見た。篠本も瀬菜に視線を向ける。二人を見つめ瀬菜は笑って答える。

「いや、たまたま二人を見かけたから一緒に帰ろうかなあ、て。」

「へえ、そうなんだ。いいよ！帰ろう。」

仲嶋が笑って言った。「いいよね？」仲嶋の問いかけに篠本もうなずく。三人は並んで学校を後にした。

「でね、これが面白かったんだよお！」

仲嶋も篠本も楽しそうに会話を交わしていた。瀬菜もその空気を壊さない程度にまざる。

ダメだ。ついていけない。一体なにがそんなに面白いのか。たかだかテレビのドラマでここまで盛り上がれるなんて、シアワセだなア。

瀬菜は必死になって二人についていった。

約一週間、瀬菜は仲嶋と篠本と共に下校していた。さすがの藍川もそのことに気がつき何度も瀬菜にやめるように言ったが瀬菜は聞く耳を持たなかった。「大丈夫。」瀬菜は藍川にそれだけを言い続けた。

「弥琴！帰ろう。」

仲嶋と篠本はいつもと同じように授業が終わると瀬菜の席まで来た。瀬菜も急いで支度を済ませ二人と共に帰る。最近、やっと仲嶋と篠本と打ち解けて来た瀬菜はここで『これ』をやめることができなかった。

「弥琴さあ、」

仲嶋の顔が真剣な表情に変わった。

「東宮さんと仲良かったんだよね……。」
きた。

瀬菜の表情も変わる。これ wait っていたのだ。

「うーん。実はさ、そんなじゃないんだよね。」

瀬菜が複雑な表情を創り答えた。

「私、好きな人がいたんだけどその人が東宮さんのことが好きだったらしくて……。」

わざとらしく顔をうつむかせる瀬菜に二人は顔を見合わせた。

「そうだったんだ……、つらいね。」

篠本が静かな声で言った。

「弥琴、実はね……。」

仲嶋が自分と東宮、そして新城について語りだした。

準備完了。

瀬菜の中で何かがひとつ終わった。

「ホント、弥琴なにやってんの？」

藍川が英語のプリントを必死で終わらせようとする瀬菜のもとへ現れた。瀬菜はシャーペンを動かしながら答える。

「この前の宿題、今日提出だよね。」

それを聞いた藍川が瀬菜の机から身を乗り出して言った。

「それじゃなくて、仲嶋さんと篠本さんのことだよ！なんで一緒に帰ってるの？ウチの話聞いてなかったの？」

ああ、と瀬菜がやっと動かす手を止め藍川のほうへ視線を向ける。

「相談にのってたんだよ。たまたま帰り誘われてさ、それでなりゆきで・・・まあ色々。」

「はあ？」と藍川が顔を歪ませた。そしてまたぶつぶつと説教が始まる。

今は午後3時42分。「その時」まであと3分弱。瀬菜は宿題をやりつつ時計に目を向けていた。藍川はまだ仲嶋と篠本について話していた。

あと2分・・・3、2、1。

「弥琴！帰ろうっ！」

そう言っただけで教室にきたのは仲嶋と篠本だった。

ビンゴ。

藍川の顔が引きつる。しかし仲嶋も篠本もそれに気づかず瀬菜のもとへ向かってくる。

「ねえ、ナニやってるのお？帰ろうよ、弥琴！」

その言葉に瀬菜はうなづき宿題を片付ける。その瞬間瀬菜の制服を藍川が引っ張った。藍川を見るとまだ顔が引きつっていた。「いいかげんにしてよ。」藍川が顔だけで訴えてくる。

瀬菜は仲嶋のほうに向く。その姿に藍川はほっと胸をなでおろした。さっきまで引きつっていた顔がもとにもどる。

「菊乃もいいかな？」

藍川は「はあっ!？」という顔して瀬菜のほうを向く。一方、仲嶋と篠本もきょとんとした表情をして瀬菜のほうを向く。

瀬菜は「いいじゃん。」といった顔で二人を見つめた。

仲嶋が口を開く。

「いいよ。みんなで帰ろう！」

藍川は既に放心状態で、まだ瀬菜の制服をつかんでいる。

そんな藍川の姿に瀬菜は必死に笑いをこらえていた。

「でね、パパがフランスのお土産にエルメスのバックを買ってきてくれたの！なんかむこうの限定商品らしくてね、ミナにぴったりに見えたんだって〜！」

興奮気味に仲嶋が話す。篠本はいつもどうり仲嶋の話にのっている。瀬菜も相手が不快にならない程度に反応している。こう何週間も一緒にいると大分慣れるものだ和我ながらに關心していた。藍川は、慣れない仲嶋の自慢話で今にもブチ切れそうな顔をしていた。そろそろ限界か・・・。

瀬菜はいつ暴れだすかわからない藍川を気にしつつ本題に入った。

「ところでさ、仲嶋さんその後新城クンとはどうなったの？」

藍川表情が変わる。仲嶋は「あぁっ！」と言って頬を少し染めた。「もう！弥琴ったら、いきなりすぎだよお！藍川さんだっているのにい〜。」

そう言った仲嶋はまんざら不快そうには見えなかった。むしろ聞いてくれたことに感謝しているようにも見える。

ホント分かりやすい子だなあ。と、瀬菜は心の中でふと思った。

「いいよ、気にしなくて。」

そう言ったのは藍川だった。声はやや震えていたがどうやら二人には気がつかれてないようだ。

「ん〜。弥琴のお友達だからいっかなあ。絶対ヒミツだからね。」

そう言って仲嶋は得意げに話す。聞いている藍川表情はいつになく真剣だった。瀬菜もこのときばかりは流さずしっかり聞いていた。

「んっとなえ。まあ、うまくいってるよう。なんだかんだ『新ちゃん』も甘えん坊さんだからさあちよつと大変かな。でもねこの間一緒に出かけたらさあ、荷物とか持ってくれてホントカッコよかったあ。最後にネックレス買ってくれたし！」

「ほら！」と、仲嶋はシャツの中からビーズのネックレスを見せてくれた。

白とピンクの透明なネックレス。いかにも仲嶋の好きそうなデザインだ。

「ああ、あと・・・。」

仲嶋が続けて話す。その言葉に藍川の目がピクリと動く。

「東宮さん見かけたよ。相変わらずムカつく顔してた。」

藍川が口を開く瞬間、瀬菜は藍川の腕を引いた。

藍川が瀬菜を睨みつける。瀬菜も藍川を見つめた。

「もう少し待て。」瀬菜が視線だけで藍川に伝える。すると藍川の目が瀬菜からそれる。

仲嶋の話は続いた。

「もうやんなっちゃった。だってそうでしょ？せっかくのデートなのにまさかあの『八方美人』と会うなんてさ。おまけに新ちゃんまで話しかけにいくんだもん。」

藍川が口を開いた。

「仲嶋さんと新城くんて、付き合ってますか？」

その問いに仲嶋が不機嫌そうに答える。

「まだだよ。でも、あともうちよつとかなあ。新ちゃんも大分ナミのこと気になってる感じだし。あとは『東宮さん』さえいなければ楽勝だよお。」

「あつ。」と、篠本が仲嶋に言った。仲嶋も自分の言葉に気づき必死に訂正しようとしていた。そんな二人を無理やりつくった笑顔で藍川は答えた。

「ああ、大丈夫。ウチも鳴世、苦手だから。」

笑顔が引きつる。瀬菜には分かった。

こういうトキ藍川は自分の気持ちを隠すのがどうも苦手らしく、わずかに『不自然さ』が生じる。だが、幸いなことに仲嶋も篠本もその不自然な表情に気が付いてない。

「やっぱり！？よかったあ。藍川さん、東宮さんと仲良さそうだから焦っちゃったあ。」

いや、実際仲良いんだけどね。

あまりにも鈍い二人に瀬菜は呆れた。藍川は「ハハハ。」と笑い声とは言いにくい声を出している。どうも彼女にはこれが精一杯なようだ。

「じゃあ、ミナがイイこと教えてあげるよお。」

仲嶋の表情が急に変わった。まるで悪戯好きの子供のようだ。

「パソコンでウチの中学校の掲示板調べてみて。多分そこに色々書かれてるから。」

仲嶋がにっこりと藍川に微笑みかける。

「いい。知ってる。」

藍川の表情がみるみる崩れていくのが分かった。しかし相変わらず二人はまったく気が付いていない。

「ええーなんだあ。もう知ってるのかあ！ふふん。結構、有名なんだねえ・・・。」

クスクス。と、仲嶋が笑う。

「だから最近来なくなったんじゃない？」

「え？」と、仲嶋が瀬菜のほうへ顔を向ける。

「東宮さん。それ見たから学校来ないんじゃない？」

仲嶋と瀬菜の目が合う。

「さっすがあ弥琴っ！」

仲嶋が瀬菜の前に立つ。

「そのとおり！なんと東宮さんが学校に来ないのは、ミナがわざわざメールで掲示板のことを教えてあげたからでえす！」

仲嶋が両手を挙げ得意げに言った。

「荒らした掲示板をね・・・。」

仲嶋がそう付け加えた。

「じゃ、最初に書きこみしたのは仲嶋さんなんだね。」

瀬菜が静かに言った。

「もちろん！この方法なら誰にもバレないし勝手に炎上してくれるからねえ。」

藍川が動いた。

仲嶋の前に立ち、大きく手を振った。

バチン。

乾いた音が鳴り響く。

「ミナっ!!」

篠本が仲嶋に駆け寄った。仲嶋は左頬をおさえ茫然としている。

「なんなのよっ! 好き放題言って、人を傷つけることがそんなに楽しいの!？」

藍川が仲嶋と篠本に怒鳴りつけた。

「ひどい……。いきなり叩くなんて……。」

震えた声で仲嶋が言った。そんな仲嶋を篠本が抱える。

「どっちが!？ あんたのせいで鳴世は学校に来れなくなったんだよ？ 自分のしたこと解ってるの？」

藍川の声が震えた。声だけじゃない、顔も手も藍川の身体全体が仲嶋と篠本に対する怒りで震えていた。

「なによっ! ミナたちばっか! あの子だってミナのこといっぱい傷つけたんだよ? やり返されて当然じゃん。それともなに? まさか藍川さんミナたちに嫉妬してるの?」

まるで子供だ。

瀬菜はまったくかみ合わない二人の言い合いをただ見ていた。しばらくして「ふう。」と藍川の大きなため息が聞こえた。

「話にならない。帰ろう、弥琴。」

藍川が瀬菜の方に向かって言った。

「先帰ってていいよ。もう少しここにいます。」

静まりかえった空間に藍川の震えた声が響く。

「なに言ってるの? 今までの話聞いてなかったの? もう話にならないんだよ、弥琴がなに考えてるのかわかんないけどこれ以上こんな奴らと関わっても良いことないんだよ。」

その言葉にためらいもなく瀬菜が答えた。

「関係ないよ。今は仲嶋さんたちと一緒にいたいんだ。」

弥琴……。

小さくつぶやいく仲嶋の声が聞こえた。

「信じらんない……。もう付きあいきれないよっ！」

そう叫んで藍川は走っていった。その姿を瀬菜はずっと見つめていた。

悪気はない。ただ、「今」藍川につくことはできない。本当に「東宮 鳴世」を助けたいのならもう少し待つ必要があるのだ。

「弥琴、大丈夫……。？」

心配そうにして仲嶋が瀬菜のもとへ駆け寄った。

「うん。へーき！それより仲嶋さんのほうが心配だよ。平気？」

仲嶋は首を横にふった。

「ううん……。すごくショック。だって藍川さん最初あんなこと言わなかったのに、いきなり怒りだすんだもん。ホント、ワケわかんない！」

そう言った後に仲嶋は静かに微笑む。

「でもいいんだ。後悔させてやるから。」

瀬菜は仲嶋の顔を見て「ふうん。」返事をする。

恐らく、明日は藍川が休むだろう。

翌日、案の定藍川は休みだった。

いつになく静かな瀬菜の周りとは正反対にクラスは騒がしかった。周りにいる男子も女子もみんな同じような話題で盛り上がっていたのだ。

「ねえ、見た？昨日の掲示板。」

「見たみたっ！ヤバイよねえ。」

「『アイカワ』だっけ？普段いい子そうに見えて裏じゃイジメっ子だろ。ありえねえ。」

「実際、あの掲示板書きだしたのもソイツなんだろう。自業自得。マジウける。」

どこもかしこもこの話。あることないこと好き勝手に話している。藍川は昨日の今日で完全に悪役にまわった。もう誰一人として藍川

を信じる者はいなくなっていた。

「弥琴。」

振り向くと仲嶋と篠本が瀬菜の前に立っていた。

「なんか、みんなテンション高いね。」

わざとらしく仲嶋に聞いてみる。

「ああ。掲示板のコトでしょ。昨日すごかったから。」

当然のように仲嶋が答え、その顔には少々笑みが見えた。

この状態があるのは、ほんの数十時間前にあったある出来事が原因だった。

『ビックニュース！「東宮 鳴世」をイジメたのは「藍川 菊乃」』

この書きこみが全ての元となった。ここからこの掲示板は即炎上。心無い書きこみばかりが映し出された。もちろん、藍川も見ていたのだろう。こんな書きこみばかりあつては誰を信用していいかわからなくなるのは当然の反応だ。実際このクラスのほとんどがこのことを知っている。というより掲示板の炎上に便乗した者が大半を占めているだろう。

しかし驚くところはそんなことではなく、『藍川を庇う者がいない』という事実そのものだった。

たかが掲示板の書きこみごときでここまでクラス中の生徒の態度が変わるものなのか。

瀬菜はそんな疑問を持っていた。

「まったく、あの時あんな事言わなきゃよかったのに……。」

仲嶋が笑いながら篠本に言った。篠本もつられてうなづく。

腐ってる。コイツもこのクラスも全部が全部。

もういいか。

瀬菜の中でまたひとつ何かが終わった。

午後7時ジャスト。瀬菜は学校の近所にあるネットカフェに来ていた。

瀬菜にとって人生初のネットカフェ。まさかこんな形で利用すると

は瀬菜自体思ってもみなかっただろう。

「はじめますか。」

個室にあるパソコンのスイッチを押す。1分ほど経ちようやく使える状態になる。瀬菜は勢いよくキーボードを打ち始める。決定ボタンをクリックし表れた画面には『S中学校掲示板』というサイトが表示された。そこを開くと相変わらず藍川のこと書きこまれていた。内容は昨日とは比べ物にならないくらい酷いものだった。

『アイカワ今日ガッコ来なかったね(笑)』

『ああービビッてんじゃね(。D。)。』

『ヒトのこと登校拒否にさせたクセして自分までおんなじ状況になるとかマジ乙wwww』

『てか、このままガッコ辞めちゃえばいいのにww』

『いつそのこと死んじゃえば(。v。)。』

『存在拒否——(。v。)。——!』

『www』

こんな書きこみがまだ続いていた。

どうかしてる。もし本当に本人が自殺した場合こいつ等は責任がとれるのか。イジメを批判しているくせに自分たちの行動を理解していない。私なんかよりよっぽど馬鹿だ。こんな状態になるくらいだったら先日あったテストの点数をとるほうがマシだな。延々と続く書きこみを見ながらふとそう思った。

瀬菜は携帯電話を取り出す。その瞬間、表情が変わる。しばらく経ち携帯を閉じる。

「ばーか。」

そうつぶやき再びキーボードを打ち込む。

『朗報。興味のある方こちらへ↓<http://oooo.com/>
+++++』

それだけ書きこんだ。

「ハハッ。さあて、どうくるんだろうなあ……。」

瀬菜が笑ってつぶやく。

投稿から3分。掲示板が荒れだした。

『なんだああああああ（。□。；）』

『マジか・・・www』

『これホントですか?!』

『隠し撮りって事だよな（――；）』

『じゃあ、この掲示板で・・・』

『これヤバくね（?――?；）』

思ったとおりの反応だった。

瀬菜は新しいページを開きとある動画サイトまでいった。ログインをして自分のページまでとぶ。投稿した動画の観覧者はすでに五十人を突破していた。コメント欄はすでに多くの書きこみがしてある。

『この動画アップした人誰ですか?』

ほとんどがこのようなコメントばかり。

「芸がねえな。」

つまらなそうに瀬菜がパソコン画面を見つめる。掲示板に戻ると様々な論争が起こっていた。

『これ、俺らヤバくね?』

『てか、アレやったの誰?』

『大体、最初にアイカワさんが東宮イジメとかほざいてたの誰だよ』

『これ始めたヤツが悪いだろ』

『サイテー』

『つか、お前らも悪いだろwww』

『人のコト言えんのかよ。死ね』

パソコン画面を前に瀬菜が微笑む。

そしてついに『あいつ』の名前が挙がる。

『そんなコトよりあの声・・・』

瀬菜の鼓動が高まる。

『仲嶋だったよな』

終わった。誰もが確信に触れた瞬間だった。

瀬菜は満足そうにパソコンの電源を落とす。

瀬菜の中でまた何かが終わっていった。

「みたっ？ 昨日の。」

「見たみた！ すごいよね。」

「てか、結局誰が投稿したんだよ。」

「今まで見なかった名前だったよね。」

「えっと、確か……。」

昨日は藍川の話題。今日は謎の動画の話題。もちろん、クラスのほとんどの者がこの話をしていた。

ガララ。

教室の扉が開く。そこに立っていたのは目を腫れ上がらせた仲嶋だった。クラスが静まり返り視線は仲嶋に集まる。それに仲嶋は気づいているのか、迷わず瀬菜の方へ向かってくる後からは篠本もついて来る。

「弥琴。話があるんだけど。」

低くて暗い声の先に瀬菜は視線を向ける。

「放課後でいい？ 私、今日提出の数学のテスト直しがまだ終わってないんだよね。」

いつも通り明るい調子で瀬菜が答えると篠本が納得いかないといわんばかりに言った。

「あんた状況分かってるの？」

完全に焦っていた。周りからの視線のせいだろう二人とも今までにないくらい声が震えている。

「分かっているとも。これを今日中に提出しないと成績がエライことになるくらい。」

二人の焦りをあざ笑うように瀬菜が答える。

「心配しなくても、今日の帰りにでも聞いてあげるよ。」

瀬菜が視線を戻す。

「約束だから。」

仲嶋はそれだけ言う教室から出ていった。それと同時に先ほどまで掲示板について話していた生徒が瀬菜の周りに集まってきた。

「瀬菜さん、どうしたの？二人に何言われたの？」

「あの動画お前がアップしたのか？」

「あの二人とどういう関係？」

今まで瀬菜になどまったく興味を持っていなかったクラスメートがいつきに瀬菜に詰め寄る。

「いや、別に大したことじゃないと思うよ。なんか悩みでもあるんじゃないかな？」

とりあえず適当に流すことにした。こんなに質問されても困るだけだ。『答え』なんて教えるわけないのだから。

あれから時間の流れが速く感じた。クラスメートの質問攻めに適当に答えているうちにもう放課後になってしまったのだ。もう授業など頭には入らなかった。なぜなら、あいつ等授業中もお構いなしに手紙やら伝言やらなにかと手段を使いしつこく聞いてくる。最終的に完全に開放されたのはついさっき。精神的疲労が思ったよりキツイ。

「弥琴。」

振り返ると仲嶋と篠本がいた。

「帰る？」

瀬菜が聞くと二人ともうなずく。

いつもと同じ道で帰る。いつもと変わらない景色、しかし空気だけが違った。

最初に口を開いたのは仲嶋だった。

「あれ、弥琴がやったの？」

先ほどと変わらない低い声だった。

「なんの話？」

空を眺めながら瀬菜が答える。もうすぐ日が暮れる。

「とぼけないでよっ！」

今まで聞いたことないくらい大きくかすれた声。瀬菜がゆっくり振り向く。

「昨日掲示板に書きこみがあったの。『朗報。興味のある方こちらへ・・・』て、それは動画サイトにつながってた。」

仲嶋が瀬菜を睨みつける。

「だから？」

瀬菜は睨みつける中島を冷静な目で見つめた。

「その動画には昨日の藍川さんと私のやり取りが録画されてた・・・。」

消え入りそうな声で仲嶋が言った。相変わらず瀬菜を睨みつけている。

「ふうん。」

瀬菜が仲嶋から目をそらし歩き始める。

「あんたがやったんでしょ。」

後から仲嶋の声が響いて聞こえる。気にせず瀬菜は近くの公園に入る。後から仲嶋、篠本がついてきた。

瀬菜はちょうど奥のほうにあるブランコに腰掛ける。二人が前に立つ。

「なんとか言いなさいよ。」

篠本が瀬菜に言い放つ。

「ワタシ以外に誰がいるんだよ。」

瀬菜が言った。その瞬間、瀬菜の表情は変わり、子どものように微笑む。

「やっぱり・・・。」

篠本が言った。その顔は怒りと焦りで歪んでいた。仲嶋が声を張り上げる。

「なんで！？友達だと思ってたのに！」

その言葉に瀬菜は笑いながら答える。

「友達？ハハッ、バツカじゃねーの。オレがいつ『友達』なんて言っただよ。」

瀬菜がゆつくりブランコをこぎ始める。

「だいたい、オレが『東宮』とつるんでたと知った時点で警戒しないのが悪いんだろ？ わざわざ一緒に帰って、その上『東宮』のイジメについてまで暴露してくれるなんてご苦労なこった。」

ハハハッと再び笑い出す瀬菜。その姿に仲嶋も篠本も動揺を隠せなかった。

「あなた誰・・・？」

あ？と瀬菜が反応する。

「誰って、瀬菜だよ。『瀬菜 弥琴』。あんた等と一緒に帰ってたら？ まさか忘れたのかよ。」

仲嶋が首を横にふる。

「ちがう、ちがうよ・・・。だって、弥琴はもっと・・・。」

ああ、と瀬菜が思いついたように答える。

「コレ、オレの趣味。遊びなんだ。昔から続けててさ、『オニゴト』ってヤツなんだけど。」

ブランコのスピードがどんどん上がっていく。

「普段は普通にするんだけど、時々こんな感じになって『オニ』の真似事をすんだよ。くだらない遊びに溺れてるヤツ等見つけたりしてさ、『オニ』になるんだよ。そいつ等が一番怖がることするんだ。」

『ママゴト』みたいだろ。と笑顔で仲嶋に答える。

「なにそれ・・・。そんなの自分だって変わんないじゃん！ 『くだらない遊びに溺れてるヤツ』？ あんただってやってること変わんないじゃない！」

仲嶋が瀬菜に怒鳴りつける。そんな仲嶋を瀬菜がブランコの上から見つめる。

「変わるよ。全然違う。第一、オレが遊び相手にしてるのはたいいてい他人の害にしかならない人間。つまりオレより先に他人を傷つけているヤツだ。お前等の遊びとは違う。」

それに・・・。と瀬菜が付け加える。

「お前等の遊びだと一方的に相手を傷つけるが、オレの遊びだと少なからず助かる人間もいるんだ。」

ブランコが次第に減速していく。

「だからって、こんなことしなくても……。」

仲嶋は今にも泣きそうな顔をしている。となりにいる篠本はずっと地面を見つめている。

「はぁ？ ホントあったま悪いな。いいか？ このくらいのこと当然なんだよ。たかがお前等の悪事が明るみに出ただけだろ。」

でも……。と仲嶋はつぶやく。その瞳には涙がたまっていた。

「本当に笑えるのはこれからだぜ。」

ブランコから飛び降りた瀬菜は二人の耳元でささやいた。

「え……？」

振り返る二人に瀬菜は怪しい笑みを見せた。そしてポケットから携帯電話を取り出す。

「お前等、録音されてた会話アレだけだと思ってたろ。」

二人の目が瀬菜の携帯に留まった。瀬菜は携帯の決定ボタンを押す。携帯から流れたのは今までの瀬菜との会話、そしてその大半がクラスメートの悪口だった。

「そ……れ……。」

声にならない声で仲嶋が言った。

「全部録音してたのか……。」

篠本が瀬菜を睨みつける。

「だからさっき言ったじゃん。『そのために一緒にいた』ってさ。」
瀬菜がにっこり笑った。

「さあて、問題です。ここのボタンを押すと何が起こるでしょうか。」

瀬菜が得意げに携帯を掲げる。二人の顔がみるみる青ざめていく。

「まさか……。」

仲嶋の瞳から雫がこぼれる。篠本が叫ぶ。

「アップする気!？」

瀬菜が怪しげな表情を見せる。そして静かに言った。

「正解者には絶望を。」

瀬菜の親指が携帯の決定ボタンを押す。

「やめてえええええっ！」

仲嶋が泣き崩れる。篠本はその場にしゃがみこんだ。

「アハハハハハッ！」

日が暮れた公園に仲嶋の泣き声と瀬菜の笑い声だけが響いていた。

瀬菜の中で全てが終わった。

「弥琴。」

授業を終え、帰る準備を済ませた瀬菜に聞き覚えのある声が聞こえた。見るとそこには藍川が立っていた。

「ああー。どうも。」

いつもどおりの反応に藍川は拍子抜けしたようだった。

そして軽く微笑む。

「そういう態度は相変わらずみたいね。」

瀬菜も微笑む。

「1、2日経ったくらいじゃ変わらないでしょ。」

それもそうか。と、藍川は瀬菜の隣に腰掛ける。瀬菜も藍川のほうに身体を向ける。

「仲嶋と篠本、登校拒否だって？」

先に口を開いたのは藍川だった。

「一昨日から変な動画が投稿されてるって知ってる？」

藍川が真剣な瞳で瀬菜を見つめる。

「さあ、知らないなあ。」

瀬菜は藍川から窓の外に視線をそらした。

「うそっ！絶対うそ！だって、あの動画撮れるの弥琴だけだもん！」
藍川は強く言い張った。しかし瀬菜は相変わらず窓の外を眺めている。

「ねえ、あれやっぱり弥琴なんでしょ？」

ようやく瀬菜が窓の外から藍川に視線を戻す。

「だから知らないってば。どうせアレでしょ。クラスの誰かがたまあめの会話聞いてて携帯で撮ったんだよ。」

瀬菜の言葉に藍川が反論する。

「そんなワケないじゃん！あるとき周りには誰もいなかったでしょ。」

「はあ。瀬菜が深くため息をつく。」

「証拠は？あるときだれもいなかった証拠はあるの？ないでしょ。」

それにあるとき一番近くにいたんだから私が何をしていたか一番知っているの菊乃でしょ。しかも、あるときもし仮に私が会話を録音してたとしてそれに気づくのも菊乃でしょ。」

瀬菜がいきなりしゃべりだす。その状況に藍川はワテンポ遅れてついて来る。そして、「ああ！」と納得したようにうなづいた。

「そうか！そうだよ。もしあるとき弥琴が会話を録音したら私が気づくよね。普通。」

「なるほど。」と藍川が勝手に納得する。その姿は瀬菜ほっと胸をなでおろす。

藍川が単純でよかった。

そしてクスリと静かに笑った。

「でもさ、」

藍川が再び瀬菜に話しはじめる。

「じゃあ、結局あの動画撮ったの誰なんだろうね。」

その言葉に瀬菜は「さあ。」とまたそっけなく返す。

“「オニゴト」は無関係者に決して知られてはならない。存在を知っているのは「オニ」と「エモノ」だけ。”

全て瀬菜自身が勝手に作ったルールだ。14年間ずっと守ってきた。瀬菜自身これも一種の遊び、本命を楽しむ為のオマケのようなものだと思っている。今まで誰一人として瀬菜の存在をバラした者はいない。そもそも、エモノの言う言葉に耳を傾けた者すらほとんどい

ない状態だった。だからバレない。見つからない。

“証拠は絶対に残さない。”

これも瀬菜が遊戯をする為に作った重要なルール。

「弥琴、帰ろう！」

藍川がいつの間にか帰りの準備を済ませ瀬菜の前に立っていた。瀬菜はゆっくりうなずき席を発つ。相変わらずクラスメートが話す話題は変わらない。変わったのは人数だけ。

教室のドアを抜けて瀬菜が振り返る。

明日にはひとり、人数が増えるかもな。

そんなことを思いながらドアを閉める。

瀬菜の日常がようやく元に戻ったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3164y/>

オニゴト

2011年11月26日22時54分発行